

# 19世紀後半:東アジア3国の不平等条約克服の可能性と限界

韓 承勳 (高麗大学)

## 【発表要旨】

19世紀の朝鮮、日本、清国を一つに連結する歴史的用語は不平等条約である。世界の主要な事典も不平等条約を19世紀の朝鮮、日本、清国が他国と締結した不平等な条約として定義している。つまり19世紀に東アジア三国が締結した不平等条約は自國史、東アジア史、そして世界史で持つ意義が大きいと言える。

ところが1880年初め、日本、朝鮮、清国はイギリスをはじめとする西歐列強が構築した不平等条約体制を克服しようとする動きがあった。1880年代初めの東京は朝鮮、日本、清国が東アジア条約体制が不平等であるという認識が表出された空間であった。日本は条約改定の豫備會談を通じてイギリスをはじめとする西歐列強と締結した条約の不平等な内容を改定しようとした。朝鮮は日本との条約の改定と西歐列強との不平等な内容が排除された条約締結を準備することができた。清国は朝鮮と西歐列強の条約締結を手配する過程で、朝鮮に不平等な内容の一部を排除することにより、朝鮮が締結した条約を根拠に、自分と西歐列強が締結した条約の改正を企画した。

以上のように、1880年初めに東アジアに西歐列強が貫徹させた条約の不平等な内容を改定しようとする動きが活発に展開された。もちろん、この改定の動きは現實化されなかった。本発表文は1880年初めの東アジア三国の不平等条約を克服する可能性を調べて、その可能性が持つ現在の意義を考察していくところに目的がある。

## 【略歴】

韓 承勳/ HAN Seunghoon

韓国 高麗大学 ドイツ語圏文化研究所 研究教授。

高麗大学 韓国史学科で「19世紀後半朝鮮の對英政策研究(1874~1895)-朝鮮の均勢政策と英国の干渉政策の關係定立と亀裂」で博士論文を受けた。近代時期、韓国と西歐列強の關係定立と展開過程を主に研究している。最近では、全地球的グローバル化の歴史の中で韓国人の生の軌跡に関心が多い。「朝米修好通商条約(1882)」の締結当時、米国の「公平さ」が持つ含意、「変更の接触地帯<三島>と<巨文島>の誕生」、「1920年東亞日報のアイランド独立戦争報道態度とその意味」などの論文と、韓国の対外關係と外交史 - 近代編 (共著)、3.1運動100年 1、4 (共著)などを執筆した。